

動脈の硬さ亢進の危険因子としての中心血圧

高橋 孝通

東京医科大学 循環器内科

【目的】 収縮期血圧は末梢よりも中心から末梢で圧較差を示し、それは圧脈反射の為に末梢よりも中心で高い。しかし動脈樹において圧脈反射異常のある場合は中心血圧の上昇は減衰を示す。現在までに中心血圧の上昇が動脈の硬さ亢進の独立した危険因子となるかは未だはっきりしない。潜在成長曲線分析を用いて、今回の前向き研究は中心血圧の上昇が動脈の硬さ亢進の独立した危険因子となるかを調べる為に実施した。

【方法】 9年間の観察期間で研究開始時に脳心血管疾患のない中年日本人男性を対象にbaPWV rAIで推定した中心血圧を健診で観察した。

【結果】 観察期間でbaPWV CSBPは全ての症例で有意な増加を認めた。潜在成長曲線分析ではこの研究期間にてCSBPはbaPWVの傾きの変化の有意な要因であった。

【結語】 本研究では中年日本人男性において中心血圧は動脈の硬さ亢進の独立した危険因子であると考えられた。